

中西伊之助と大正期日本の「不逞鮮人」へのまなざし

——大衆ディスクールとコロニアル言説の転覆——

アンドレ・ハイグ

はじめに

1922年12月18日の読売新聞に掲載された「霧（朝鮮日記の一節）」という随筆で、同年2月に小説家としてデビューしていたプロレタリア文学者・中西伊之助（1887-1958）は、その秋の朝鮮北部への旅を回顧した。作者は、霧に包まれた秋の鴨緑江上流の江岸で静かに瞑想していたところ、突然「その濃密な霧の中で、鋭い銃声が、神経をふるはせて響いた」のを聞き、間もなく「あわただしい靴音が、大地を伝わって響いて来た」ことに気づく。その一帯を満州との国境という「危険地帯」として意識する中西は、銃を発射して霧の中から近づいて来る者について次のように語る。

私は来たなと思った。靴音はなに者だかわからない。もし私たちの「生命財産を保護」してくれる警察官だったら、まづ安心だが、私たち日本人を仇敵視している、いはゆる不逞鮮人の諸君だったら、それこそおしまいである。不幸にして私は宿から借りたドテラと称する日本人の不格好なキモノを着ていたのだ。私はちっと兎のやうに聴覚を鋭敏にして、とある河楊柳の陰にかくれていた¹⁾。

この短い旅行記では、語り手・中西が「不逞鮮人」に虐殺されることを免れて旅が無事に終わるのだが、結局事件の真相は、帝国臣民を保護すべき警官が、霧のなかで「不逞鮮人」を狙って発射した弾丸が、皮肉にも、「日本民族発展の先駆をする敬愛すべき、しかし不幸な淫売婦」に間違ってあたったということであった。しかし、中西の「霧」は身分不明で危険な「他者」との接触を通じて当時、(帝国臣民として)「日本人」であって「日本人」ではなかった朝鮮人に対する「内地人」の不安と恐怖を一種のエンタテインメントとして取り上げ、前景化したのである。随筆「霧」のキーワードは、現在でも差別用語として用いられている「不逞鮮人」という言葉であった。

大正期の半ばから台頭し、一時期に官憲やマスコミ言説において大きな恐怖と不安の対象となった、いわゆる「不逞鮮人」というコトバとイメージは、1919年の三・一朝鮮独立運動を受けて、新たに形成された朝鮮民族のアンチ・コロニアル勢力を凶暴なテロリストとして表象する様式の主要な現れであった。ポスト世界大戦・ポストロシア革命の時代で、帝国の内地でも外地でも、ともに政治的・社会的動揺が起っていた。そうした時代の中で、「不逞鮮人」という言葉とイメージは、大正のマスコミを代表する大手の新聞・雑誌に加えて、新しい大衆文学と大衆向けの風刺漫画にも黒い影を落とした。この「不逞鮮人」をめぐる排他的な言説は、皮肉

にも「同化」や「内鮮融和」などを唱える「文化政治」のような包摂的な言説と並行し、異民族としての朝鮮人の主体性を否認されながらも「不逞鮮人」と決め付けられた一部の朝鮮人の恐るべき他者性を強調し、排除の対象にした。つまり、「外地」における帝国臣民の中の不逞分子の分類と定義によって、帝国「内地」の日本民族の位置と境界は定義された。だが、「不逞鮮人」言説は大正期の植民地主義や民族政策に内在する諸矛盾を隠蔽するように働きかけた一方、日本民族の主体性の境界を危うくする帝国の多民族性と反抗的な異民族に対する解消し切れない、根強い不安とアンビヴァレンスが、包摂的言説と排除的言説との隔離として出現したのである。こうした中、排日朝鮮人に対する危機感が最高潮に達したのは、1923年の関東大震災後に「不逞鮮人」と烙印を押された在日朝鮮人への迫害・虐殺事件である。この時期に至り、帝国の中心における揺らぎ・断層が暴露されることとなった。

しかしながら、官憲とマスコミ言説のこの傾向とは対照的に、同時代の日本近代文学の主流は、恐ろしいとされた朝鮮人の排日抵抗、または植民地朝鮮そのものに対しては、少なくとも関東大震災まではほぼ一概に無意識または無関心であった。この点で大正期の文壇を批判した戦後の研究報告も少なくない²⁾。同じように、1920年代初頭という段階においてまだ勃興期にあったプロレタリア文学運動の作家は、三・一独立運動によって可視化された朝鮮における植民地問題や「不逞鮮人」言説の前で、一般に沈黙を守っていた。しかも、石坂浩一、林淑美や川村湊がすでに指摘したように、一般に日本の社会主義運動とプロレタリア文学運動は「階級問題」にあまりにも集中したため、これによって解消されるはずの植民地主義における民族問題への盲点を抱えていた³⁾。

このような中で、大正のプロレタリア文学・芸術運動の初期から活躍した中西伊之助の朝鮮への眼差しを考察することには、特別な意義がある。1920年代前半に中西は持続的に朝鮮に強い関心を示し、「不逞鮮人」が登場する一連の批評、紀行文や小説を執筆した。この時期の中西の作品は、「不逞鮮人」像をはじめ、大衆向けのコロニアル言説とイメージに対応しながら朝鮮人という「他者」に対する恐怖に支配された表象様式と意識の構造を解剖・転覆するための対抗言説と表現法を模索した。この意味で、中西伊之助は中野重治など後年朝鮮との植民地的関係を問題化し被支配民族の同胞と連帯を目指したプロレタリア作家に先立つ先駆者であり、朝鮮における被支配民族との関係に本格的に取り組むプロレタリア文学のもう一つの「前衛」として注目に値すると思われる。これは、因習的な表現の打破と変革をめざす「アヴァンギャルド」というより、むしろ波瀾剛が30年代の満州国の位置に対して指摘したような「地政学的前衛」としての「外地」であった三・一独立運動時の朝鮮を直視するために、前衛的な政治思想と大衆文学・文化への志向が融合した、外地文学としての「前衛」と言えるだろう⁴⁾。

本稿では、関東大震災までの中西伊之助の〈朝鮮〉関連テキスト、特に1922年9月に発表された中編小説『不逞鮮人』を、「不逞鮮人」言説というコンテクストの中で読み返す。中西の作品は、官憲のコロニアル言説とセンセーショナルなマスコミ報道と共に、植民地主義と被圧迫民族の反帝国主義的抵抗をめぐる表象と言葉の闘争に積極的に参加したと考えられる。中西には、大衆エンタテインメントとしての「不逞鮮人」像やそれに対する日本人の恐怖をある意味で食い物にすると同時に、それを問題化し、皮肉によって風刺して転覆する、という両面性があった。支配的なコロニアル言説とその用語を問いただす対抗言説として中西伊之助のテキストを

再検討することによって、被支配民族の抵抗に対する大正期日本帝国の眼差しと、「前衛」であるプロレタリア文化・文学の植民地主義批判の可能性と限界がうかがえるのではないだろうか。

1. プロレタリア文学者としての中西伊之助と朝鮮を舞台にした「反植民的」小説

プロレタリア作家として多岐にわたる業績を持つ中西伊之助は、労働文学やプロレタリア文学運動の中で、独特でやや不安定な位置を占めている。中西は、小説家になる前に既に新聞記者を経て1920年に東京市電ストライキを指導し、労働運動家として名をあげていた。1922年に小説家として創作活動を開始した中西は、1923年4月から『種蒔く人』の同人になり、また1924年6月に『種蒔く人』の後身である『文芸戦線』の創刊に関わり、『文芸戦線』の編集人を勤めた。1926年に除名されるまで日本プロレタリア文芸連盟（プロ連）のメンバーでもあって、以降日本無産派文芸連盟に加盟した。他方で、『農夫喜兵衛の死』などで農民文学にも関心を示し、農民自治会運動を展開している。小林茂夫によると、1920年代末期から中西が「文学運動を離れ、主として堺利彦らの無産大衆党、日本大衆党、東京大衆党などの無産党の活動に参加して」つまり創作活動から本格的な政治活動に転換したということである⁵⁾。戦後、中西伊之助は日本共産党所属の衆議院議員として当選された。

1920年代の初期プロレタリア文学における中西の印象的な独自性は、一貫して朝鮮の植民地支配をめぐる諸問題に焦点をあわせたことであろう。1922年2月に発表された処女作『楮土に芽ぐむもの』は、勝村誠が指摘したように、「長編小説として初めて日本の朝鮮植民地支配を批判的に描き出した作品として注目され」た⁶⁾。当時でも、宮本百合子は無産階級の文学の推移をたどった際、「植民地としての朝鮮とその民衆が自由をもとめるたたかいを描いた」中西伊之助の小説『楮土に芽ぐむもの』を「題材において、これまでの作家が扱わなかった領域に進出した」プロレタリア文学作品として取り上げて評価した⁷⁾。同じ1922年に『不逞鮮人』という中編小説を『改造』9月号に発表し、翌年には、朝鮮人革命運動家、いわゆる「不逞鮮人」を主人公にした長編『汝等の背後より』を発表した。それ以外にも、同時期に「新しき朝鮮」、「朝鮮人のために弁ず」、「朝鮮文学に就て」や「朝鮮解放運動概要」など、朝鮮に関するエッセイを数多く残した⁸⁾。文学作品にあらわれる、植民地期朝鮮へのアプローチは、社会主義を基にした批判的視点と通俗小説的要素を融合したものであり、日本統治下の朝鮮人の搾取や虐待を批判しながら、日本民衆の朝鮮民族に対する軽蔑・不安など民族的偏見と民族紛争にも正面から取り組んだ。この段階において、中西ほど帝国主義・植民地主義が生産する問題を題材にした左傾文学者はいなかったのである。従って、中西伊之助に触れずに大正期の日本文学における朝鮮表象の位置と意義を論じることは不可能に等しいと言えるだろう。

このような朝鮮や植民地主義に対する中西伊之助の高い関心の要因を考える際に、彼の朝鮮体験は必ずあげられる。「愛読者への履歴書」によると日韓併合前後、中西は朝鮮半島に渡って数年間新聞記者として働き、記事の中で寺内総督と大資本家の藤田伝三郎を批判したために投獄されているという⁹⁾。『楮土に芽ぐむもの』は、この体験に基づいて書かれたとされている。中西伊之助研究者・高柳俊男は、中西が勤め口を探して一般植民者として朝鮮に渡る前に既に

「1906年には日本社会党の大会に出席」し、社会主義の洗礼をうけていたために、土地収用など朝鮮人を苦しめる植民地支配の実体を理解することが可能であったと、指摘した¹⁰⁾ しかも、他のプロレタリア文学者と違って、元植民者であったためか、中西にとって植民地主義とはただ社会主義理論の中の抽象的概念だけではなく、民族間の圧迫・弾圧・搾取という具体性があったであろう。例えば『楮土に芽ぐむもの』においては、「土地調査」など植民地政策がもたらした民族的文化と生活への負の影響や、軽蔑と恐怖が混ざり合う宗主国民として日本人の朝鮮観が問題化された。

そして、自分の植民者体験に加えて、中西の眼差しを朝鮮植民地支配の問題に向き合わせた、もう一つの要因は、おそらく当時朝鮮関連の官憲・マスコミ言説における「不逞鮮人」騒ぎにあったであろう。三・一独立運動後「不逞鮮人」のテロを巡る緊張がピークに達する状況において小説家として登場した中西のキャリアは、朝鮮民族解放運動の展開と軌を一にしているところがある。朝鮮で三・一独立運動が勃発した同じ1919年には、中西は日本交労働組合の理事長に選ばれて、内地で闘争的な労働運動を起そうとしていた。翌1920年の2月と3月、東京市電ストライキを指導し、治安警察法違反で2回も収監された。このように、中西伊之助は朝鮮総督府や本国政府によって数回にわたって投獄され、当局から「危険人物」とみなされていたため、同時期に同じように敵視された「不逞鮮人」に対して関心と、ある程度の共感を感じたにちがいない。そのため「不逞鮮人」という烙印をはじめ、帝国言説による、抵抗者に対する言葉遣いと世論の操作には非常に敏感であった。他方、三・一独立運動の勃発や朝鮮人の武装抵抗により恐怖と不安の対象としての朝鮮に対する社会的関心が高まったことが、プロレタリア作家中西伊之助に逆に刺激を与え、作品を通じて植民地主義と大衆の朝鮮認識を問題化する可能性を新たに切り開いたのではないか。そして、初期の朝鮮関連の小説の中で、この大衆のコロニアル言説と表象への敏感な把握と交渉が最も明らかに示された作品は、1922年の『不逞鮮人』であった¹¹⁾。

小説『不逞鮮人』の設定は、自称「世界主義者」である主人公・碓井栄策が、不逞鮮人と心から語り合いたいという願望から、不安を感じながら危険地帯への旅を冒して彼等の根拠地のある朝鮮西北部に入り、「排日鮮人」の指導者と思われる「主人」との面会を求めるといものである。「不逞鮮人の巢窟」という目的地に達するまで、栄策は日本人と朝鮮人の間に横たわる民族の境界や自己認識の境界を象徴する、様々な境界と障害物乗り越えざるを得ない。ついに片言の日本語が話せる朝鮮人の「主人」と、三・一運動の苦しい記憶を通じて、誠実なコミュニケーションの場を獲得する。しかし、親切的な「主人」は「不逞鮮人」ではないとほぼ納得したところで、栄策はまた非理性的な「不逞鮮人」恐怖症と潜在的な民族偏見に負け、日本人である自分に怨恨を抱く朝鮮人に虐殺される妄想を見るなど、主人の家でゾットするような一夜を過ごす。だが、主人からは何の脅威もなく、すべての恐怖は主人との相互不信と栄策自身の罪悪感から生まれたことが最後に明らかにされる。

『不逞鮮人』が出版された当時、江口渙、生田長江や、矢部周ら文芸批評家は中西の『楮土に芽ぐむもの』と比べ、多くの弱点を指摘し、あまり高く評価しなかった¹²⁾。確かに『不逞鮮人』は「芸術作品」としては弱点があったかもしれない。しかしむしろ、中西伊之助は、自称プロレタリア作家として、自分の作品が純粋な「芸術」であるかどうかにかかわらず、「ブルジョ

ア社会を滅す武器としての小説だ。階級戦としての Weapon」だと見た上で、プロレタリアートもブルジョアも面白く読めるプロパガンダを目指すという文学観を持っていたようである¹³⁾。従って『不逞鮮人』は、単なる小説としてだけではなく、芽生えたばかりの日本探偵・推理小説の要素を取り入れた小説という形で「不逞鮮人」言説の表象、コトバとその裏にある意識を告発する対抗言説への試み・実験として捉えるべきではないだろうか。また、1920年代当時において『不逞鮮人』が文学を通じて朝鮮独立運動の意義を積極的に模索した唯一の小説だったことは注目し得る。『不逞鮮人』には労働運動や階級闘争といったプロレタリア文学の典型的な要素が少なく、「階級」よりは「民族」問題に焦点を合わせていると言ってよいであろう。例えば渡辺一民は中西の『不逞鮮人』をE・M・フォスターとアンドレ・ジードの「反植民地小説」と並べて、「『楮土に芽ぐむもの』」に比べてはるかに純度の高い反植民地小説として、三一独立運動を素材に書かれたのが『不逞鮮人』だった」と高く評価している¹⁴⁾。また黒川創は「コンラッドやフォスターの作品に近代文学としての重きを置くイギリス文学史と較べても」、中西の『不逞鮮人』その他の反植民地主義的な日本の外地文学が、従来あまり注目されなかったことを「近代日本文学史の幅の狭さ」という問題として指摘している¹⁵⁾。

日本の反植民地主義的小説としては、台湾先住民に対するコロニアル言説（文明・野蛮二項対立）と同時に関東震災時の日本国内における思想弾圧を風刺している佐藤春夫の『魔鳥』（『中央公論』1923年10月）や、1920年代後半、1930年代の黒島伝治、伊藤永之介、葉山嘉樹など日本のプロレタリア文学者の作品が挙げられる。また、近代日本の朝鮮人観を問題化した文学作品は、震災時の朝鮮人虐殺事件を受けてあらわれた。ようやくこの時、多くの文化人が、日本民衆の朝鮮問題に対する意識に対して目を覚ました。その中でも、プロレタリア陣営の作品に加えて、徳田秋声の「ファイヤガン」（『中央公論』1923年11月）や芥川龍之介の「大震災雑記」（『中央公論』1923年10月）など、皮肉によって「不逞鮮人騒ぎ」を風刺した作品は、中西の対抗言説としての小説と共通点がある。しかし、中西の『不逞鮮人』は関東大震災よりちょうど一年前に、すなわち、朝鮮人に対する恐怖の最中で発表されていた。このことは、文学史においても非常に意義深い。ここでも中西は先駆者、または、「前衛」であった。

だが『不逞鮮人』は確かには反植民地文学の特徴はあるが、それよりも複雑な両義性を持つ作品である。小説『不逞鮮人』は、朝鮮の排日運動に関するマスコミ言説に対応して、「不逞鮮人」という題名をはじめ、恐怖で支配されている、朝鮮人他者を表象するシステムの表現法・言葉の再占有し皮肉なのである。ここには、コロニアル言説の真ん中に入って、その中からそれを転覆する可能性が開かれている。したがってこの作品に関しては、当時の朝鮮をめぐる大衆ディスクールとの「間テクスト性」の交渉の中で読まなければ、解読できないと言える。

2. 朝鮮解放運動の影：官僚用語からマスコミ言説に広がった「不逞鮮人」

中西が極めて意識的に小説の題名に選んだ「不逞鮮人」という恐怖を想起させる民族蔑称が1919年ごろから普及し始めたことは、宗主国における朝鮮認識と朝鮮人表象様式の重要な転換を告げるものである。満州における日本帝国の対朝鮮人政策を研究した歴史家バーバラ・ブルックスは次のように指摘している。「特に朝鮮半島で起こった1919年3月の反乱の後、当局と大

衆の用語には被支配民族に対する支配者の恐怖のディスクールが反映された。内地から植民地的周囲まで響き渡った言葉は『不逞鮮人』であった。¹⁶⁾ ブルックスが言うように、1919年3月1日から京城で勃発した三・一朝鮮独立運動は「不逞鮮人」言説の出発点であった。第一次世界大戦とロシア革命が加速する社会的・思想的動揺期に起きた大規模な、しかも国際的な反響を引き起こした三・一独立運動は、多くの朝鮮人が日本の植民地支配に対して反感を抱えていることを日本の官憲と大衆に明白に示した。日本国内では「騒擾」や「暴動」として語られ、伝えられた三・一運動は、内地の新聞では第三国やキリスト宣教師の煽動によるものなどととらえられ、非難・蔑視されたが、それより大きな不安を呼び起こしたのは、独立運動がむごたらしく鎮圧された後に上海、満州、ロシアなど国外で分散して続けられた組織的武装抵抗——日本側から見ればテロ行為——であった。1919年3月以降、新総督齋藤実を狙った南大門駅爆弾事件（1919年9月）、赤化朝鮮人の尼港事件への関与（1920年2～3月）、李王世子暗殺未遂事件（1920年4月）や満州の間島地方の武装朝鮮人団による日本領事館攻撃（1920年10月）など、朝鮮人が関わる様々な「兇暴」事件が続出し、それらが、「不逞」というラベルで日本に伝えられると、本国の人々の恐怖心を刺激し、朝鮮人に対する大衆のイメージを支配するようになった。

帝国全体に響き渡った言葉である「不逞」と「不逞鮮人」は、当局の公式用語と区分から派生したと考えられる。例えば、併合直後、朝鮮総督府が作成した寺内正毅暗殺陰謀に関する報告書「不逞事件ニ依ッテ見タル朝鮮人」では、排日陰謀に関わった朝鮮人に「不逞」という言葉を冠している¹⁷⁾。または、1910年代半ばから、在満州日本領事館発行の公文において、朝鮮人が「不逞鮮人」であることは、満州から追放する「在留禁止命令」を裏付ける根拠として用いられている¹⁸⁾。三・一独立運動を受けて当局の「不逞鮮人」に対する懸念・警戒が当然ながら高まり、「在外不逞鮮人ノ近情」など韓国史料研究所が収集した、900ページにおよぶ大量の「不逞鮮人」関連の朝鮮総督府報告書が、この懸念の深さを証明するものである¹⁹⁾。韓国史料研究所長・金正柱の解説によると、『不逞鮮人』という言葉は、日帝治下において韓人にあたえられた此類のない悪質な述語である。さいきんは『不良外人』とか『好ましからぬ三国人』などとよく謂われるが、その意味するところはおよそ根本的に違う。考えてみれば、日帝時代の韓人観なるものは臭味の強いこの一語に集約されていたかも知れない²⁰⁾。さらにいえば、「不逞」というのは、「不平をいだし、従順でないこと」や「無法」という意味であるが、大正期の言説における実際の使用から見ると、内地人の「反逆者」や反体制の過激主義者ではなく、主に独立運動に関わる朝鮮人や思想犯を犯す朝鮮人だけに当てられてきた。また、同時代の日本の新聞では、しばしば植民地統治に反抗するアイルランド人は「不逞」と呼ばれたことから、大正後半では「不逞」という言葉は、特に被支配民族のアンチ・コロニアル思想と抵抗運動を暗示するニュアンスを帯びるようになったと思われる²¹⁾。

官庁の内部用語であった「不逞鮮人」は、1919年以降大衆言説に越境し、初めてマスコミ報道にあらわれ、一時期流行語になっている。「不逞鮮人」像とそれに伴う不安を伝搬する役割を果たした媒体は、センセーショナルな兇暴犯罪を好む内地の新聞・雑誌であった。京都大学の水野直樹らが運用している一部の新聞を対象にまとめた「戦前日本在住朝鮮人関係新聞記事」データベースの検索結果によると、「不逞鮮人」に関する見出しのある新聞記事の件数は、1919

年3月から関東大震災の1923年9月までの4年半では111件だったのに対して、19年以前は不逞鮮人に関する事項は一切なく、1923年から敗戦までは71件と少なくなっている²²⁾。したがって、この期間が不逞鮮人騒ぎのピークであることは明らかであろう。

この時期、朝鮮の排日行動と思想に関する新聞・雑誌記事は実に多く、そのほとんどはいわゆる「不逞鮮人」の爆弾や暗殺の陰謀、不逞思想の文書の配布などに焦点を当てたものである。当時の新聞は、朝鮮人独立運動家や上海政府がかかわる「事件」を当局の発表のまま無批判で報道する一方、「戦慄すべき」「狂暴驚くべき」のような、読者の恐怖心を刺激する表現を使う傾向が見られた。また頻繁に、具体性のない、曖昧な不逞鮮人の「陰謀」を示唆する記事が載せられた。個々の事件と陰謀を報道する記事が最も多いが、「不逞鮮人」脅威の全体像を総括した記事としては、1920年10月の「読売新聞」に3回連載されたシリーズ「厄介な不逞鮮人」を見れば、代表的な筆法が明らかになると思われる。第1回の「厄介な不逞鮮人（上）露国過激派と通じて我が官民を殺傷す」は、次のように始まる。

這般琿春を襲撃せる馬賊団は執拗に再度襲撃を企てる為同地方一体の人心を驚愕せしめ且つその惨害測るべからざるものあり。更には是等の土匪は各地を襲撃してあらゆる暴虐を逞うすべしとさえ伝えらる。而してその集団は単に馬賊のみならず武装せる不逞鮮人及び露国過激派等も多数混入し居れるものの如し。若し風説の如く鴨緑江を中心とする不逞鮮人団の一隊が吉林省地方に於ける馬賊団並に露国過激派の集団と共に相策応して今回の如き暴虐を敢てしたるものとせば実に由々敷重大事変にして今度の行動如何に依りては憂慮に堪へざるものあるべし²³⁾

不逞鮮人を単なる「馬賊」と同等に見なす一方、馬賊よりも危険であるかのように述べている。残りの2回は、「不逞鮮人団の陰謀策源地」である上海韓国臨時政府の恐るべき動静を探索したり、また不逞朝鮮の危険思想とロシア過激派との関係を非難したりする形で続いた。

官憲とマスコミの「不逞鮮人」言説に関する先行研究は少ないが、排日朝鮮人の抵抗をめぐる言説と「文化政治」や「内鮮融和」など朝鮮に対する包摂的な言説とは裏表の関係にあったことは、関連研究報告に示唆されている。肝心の三・一独立運動とその鎮圧は、「不逞鮮人」言説を生むと同時に、国内外で論争や個々の朝鮮統治政策への批判もあって、「武断政治」から「文化政治」への転換という改革ももたらしたことを見逃してはならない。だが、松尾尊兌が述べたように「一応いわず文化政治が採用され、朝鮮民族と日本民族との権利の平等をみとめるとの方針が発表されると、世論はこぞってこの新方針を歓迎する一方、朝鮮民族の独立運動に対しては「不逞鮮人」を断乎とりしまれと、これを敵視する姿勢を示したのである。このジャーナリズムの態度は、朝鮮問題に関する言論に加えられた政府の弾圧と相まって、国民に朝鮮人蔑視観とそれと裏腹の恐怖感をますます浸透させる役割をになうものであった。」²⁴⁾ ブルックスも、大正期の「不逞鮮人」への眼差しに、朝鮮人を帝国臣民の共同体から排除すべき一部の「不逞鮮人」と、「同化」の対象になり得る温順な朝鮮「良民」と見分ける分化方法を見いだしている。つまり、「内鮮融和」というフィクションを維持するために、多くの朝鮮人が植民地支配に反感と怨恨を持っていることを隠蔽するように働きかけたということである。また大正期のコロニ

アル・テロリズムの言説として、マスコミにおける「不逞鮮人」騒ぎは、反抗と暴力性を朝鮮の民族特徴に決め付け、日本社会の朝鮮観・朝鮮人観に大きな影響を及ぼしたと考えられる。この朝鮮人表象の様式には、過酷な植民地支配や、合法的な抵抗の表現を不可能にする弾圧というコンテキスト無しで「不逞鮮人」を表象し、語る傾向が強かった。結果として理解するに値しないテロリストと反逆者に対する恐怖という非理性的な力によって、独立運動の政治運動としての正当性を否定し、抵抗する正当な理由を奪うと同時に朝鮮人の抵抗の真の原因である植民地主義を隠蔽し、批判を妨害する機能を果たしたと思われる。帝国は、ただ政治や武力だけで植民地を支配したのではない。松尾やブルックスらの研究が示唆するのは、言葉と表象の操りによって、そして他者に対する恐怖の操縦によっても、支配と統制が維持されたということである。

3. コトバ・表象としての「不逞鮮人」をめぐる闘争と対抗言説

ただし、1920年代当時、「不逞」の表象とコトバを問いただす声は中西以外にもあったので、ここで簡単に紹介したい。例えば、「大正デモクラシー」の思潮を代表し、朝鮮支配と同化政策を批判した知識人吉野作造も、「不逞」を中心とする、朝鮮人に対する言葉使いを問題として意識した。1920年の『新人』2～3月号の論文では「純粹の大和民族でない朝鮮人が、しかもあのような状態で併合され、又あのような状態で統治された朝鮮人が、日本国に対して内地人と同じような考をもちえないのは、我々としては遺憾のことではあるが、自然の成行としては亦已むを得ないと思われる。そこで朝鮮人の立場から云えば、日本の国法に反抗するという事は、純粹の道德的立場から観て強ち不逞の暴行ということとは出来ない。随って之に不逞兇暴というような汚名を冠するのは、我々としても良心が許さない」と主張した²⁵⁾。そして、前述の「厄介な不逞鮮人」など「不逞鮮人」報道を多数流した同じ『読売新聞』の中でも、支配者の用語を告発する試みが散見される。特に読者からの投稿を掲載する「斬馬剣」欄では、内地人も朝鮮人も「不逞鮮人」報道への疑念を表現した投稿を書いていたようである。たとえば、「不逞鮮人」という題で投稿した栗原荒野は、「此頃の新聞用語には不愉快な熟字が幾許もあるが、『不逞鮮人』の不逞なぞはその尤なるものだ。誰が一体こんな常套語を発明したのか…どう考えても嫌な熟字だ」と始め、『春秋左氏伝』における「不逞」の語源を紹介してから「政府の政治や現在の社会組織に不平不満を抱く者を不逞と言うのなら朝鮮人に限った事じゃない。我国の無政府主義者や社会主義者は勿論、現在では政友会以外の国民は殆んど凡て不逞国民であろう。不逞学者、不逞思想家、不逞記者、不逞労働者、不逞青年、不逞婦人—ドレもコレも不逞の徒ばかりだ。」と風刺的に述べている²⁶⁾。

また、1922年1月の、朝鮮人と思われる李鐘模の投稿は、「警視庁の人達から見れば、排日派と云えば遠慮なく不逞鮮人と名付けるし、親日派だと云うたら、善良な国民だと云うに違いない。けれども私は排日派でもあれば、また親日派でもある。何故排日派か私は答える、日本人が我等を排斥するから私が仕方なしに反抗しなければならぬ」と、異なった観点から問題に取り組んでいるが、どちらの投稿も、「不逞の徒」対「善良な臣民」や「排日」対「親日」の二項対立の枠組みをひっくりかえし、風刺し、帝国におけるアイデンティティの構造を問題化した

ものである²⁷⁾。

同時期、「不逞鮮人」表現法に対してはよりラディカルな挑戦もあった。無政府主義者である朴烈・金子文子夫妻は、自ら堂々と「我々不逞鮮人」と名乗るだけでなく、「不逞鮮人」言説を風刺するようにそれをもじって自らの雑誌を『太い鮮人』と命名した。『太い鮮人』の創刊号では、「日本の社会で酷く誤解されて居る「不逞鮮人」が果たして無闇に暗殺、破壊、陰謀を謀むものであるか、それとも飽く迄自由の念に燃えて居る生きた人間であるかを、我われと相類似せる境遇に在る多くの日本人労働者に告げる」と宣言している²⁸⁾。同誌2号で朴文子（金子文子）が「所謂不逞鮮人とは」を執筆し、「不逞鮮人！新聞や雑誌にちょいちょい此の言葉が見受けられる、そして諸君もよく用いられるようだ、だが果たして諸君は是を正しい意味に於いて解し、而して正しい意味に於いて使って居らるるだろうか？多くの場合侮辱の意味を以って呼ばれては居ないか？」と疑惑をかけ、「不逞鮮人」を「飽く迄自由の念に燃えて居る生きた人間」と再定義する²⁹⁾。ここには、ジュディス・バトラーも述べたような、どんなに中傷的なコトバでも再占有できるというリシグニフィケーション（resignification・意味し直し）というラディカルな戦略で、「不逞鮮人」という支配者の用語を逆手にとり、まったく違う意味を托して取り戻す試みが見られる。

中西の作品も、これらの事例と共に対抗言説に属していると言えるだろう。確かに、それは「不逞鮮人」像に対して同じような問題意識を共有していたと思われる。しかし、正面から「不逞鮮人」言説を問いただそうとした「斬馬剣」の投稿や『太い鮮人』と、複数の意味や解釈など多義的不確定性を維持できる文学的表現法を使った中西伊之助とは、ある程度異なる。『不逞鮮人』などでは、中西は「不逞鮮人」という蔑称と朝鮮民族解放運動を蔑視・敵視する言説を直接に非難しないし、または日本人の身に危険を及ぼし兼ねない排日朝鮮人の存在を否定していない。逆に、中西の作品には、表面的には「不逞鮮人」に対する恐怖を裏付け、誇張するような節が多いのである。例えば、最初に紹介した「霧」など朝鮮への旅を語った新聞掲載の紀行文では、不逞鮮人からの脅威や日本人としての話者の恐怖が遠慮なく描写されている。「霧」で、「不逞鮮人」と思われる人間の靴音が近づくと、語り手が「今にもその人間たちが、私を見つけ出して虐殺しやしないかと思って戦慄した。云うまでもなく、この一帯は朝鮮の北の国境で、ここから内地の方へ、多くの『不逞鮮人』や赤色鮮人が竄入するために、最も固い警備しているところである。浦港が赤化してからは、尚ほさらのことであった。」という一節がある。また同時期、「東京朝日新聞」に載った「瓢の花咲く家一朝鮮から」という旅行記では、中西は1920年秋の朝鮮北部と満州への旅についてこう述べた。

実際、それは冒険旅行であった。なぜなら、間島附近の馬賊の跳梁はたいしたものではないとしても、それから奥地になると、危険千萬で、例の『不逞鮮人』の団体があの北の国の警備を突破して、彼等の唱ふる有名なモットである「北よりの言葉」をもたらして、侵入して来るからである。もしその一隊にでもぶつかろうものなら、匕首か、爆裂弾かが日本人の私である脳天かつ胴つ腹に見舞はれることを覚悟しておかねばならない³⁰⁾。

やや皮肉を込めていると解釈できるが、このように「不逞鮮人」という黒い幻影を加味する

ことによって、風景と風俗しか描写しない一般の紀行文にない一風変わった趣味を漂わせ、恐怖と絡み合った読者の関心を誘惑しようとしたのではないだろうか？ある意味で、中西の作品はマスコミにおける「不逞鮮人」言説とその対抗言説との間に曖昧な位置を占めたように見える。中西の作品からは、「不逞鮮人」という言葉とイメージの恐ろしい力を十分に把握して大衆の注目を獲得するためにそれを食べ物にする一方、同時に皮肉な転換によってその力を逆手に取りコロニアル言説を問題化しようとする意思も読み取れるのである。

4. 「不逞鮮人」根拠地への危険な旅：支配的言説と対抗言説の間に立った小説『不逞鮮人』

1922年の小説『不逞鮮人』は、読者に一定の期待を抱かせる題名をはじめ、「不逞鮮人」報道が作った土台の上で建てられている。物語が最も明白に大衆メディアの「不逞鮮人」言説に対応するのは、日本人の主人公・栄策が排日朝鮮人の指導者（以下「主人」）に会うために、「不逞鮮人の根拠地」への不安に満ちた旅を語る作品の前半である。栄策の旅のキーポイントは、緊張し漠然とした危険に対する不安や恐怖といった強い雰囲気を設定すると同時に、朝鮮という風景への認識を支配する栄策の心境をも設定することにある。

栄策は朝鮮人の通訳と共に主人の村に近づくにつれて、マスコミの「不逞鮮人」言説がこだまする「不逞」事件を数回にわたって思い出し、常に自分の身に身体的な脅威を感じる。例えば、過去にその地域で起きた暴徒による襲撃や強盗事件、狙撃事件、日本警察隊と「不逞鮮人」との戦闘、そして主人公が想像する朝鮮人による日本人虐殺などが、小説の冒頭からすぐ現われ、栄策に不安を感じさせる。もちろん、栄策が想像している凶暴な事件と、内地の「不逞鮮人」報道に出てくるような話の内容と、ほぼ一致する。また、『不逞鮮人』では意識的にそのような報道を想起させる節も現れる。例えば、次の一節がある。栄策は、面会しに行く人物について次のように述べている。

…数年前に、この国で、ある民衆運動は起って遂に大きい騒擾の渦を捲き起こした時、まだほんの女学校の生徒であったその人の娘は、若い女ながらにその恐ろしい渦中に入って死んでしまった。娘を喪った父親は、すぐ京城の生活を引払って田舎へ籠ったのだということであった。その人は、今では排日鮮人団の首魁であると目されている。これから栄策の行こうとするその地方は、幾つものそうした団体があって、常に不穏の情報を伝えては人心を戦慄せしめている。(33頁)

また、それからすぐに、栄策と通訳者が歩いていると、

その度びに栄策はあたりを見渡した。人影はどこにもない。さすがに彼は不安な気がする。自分達ばかりが、平地からは丁度いい目標になるところを歩いているのだ。自分の白服や、通訳の仕立て下しの純白の周衣が、露骨に輝く、遠くのもの蔭から狙い撃ちをするのには最も適当であるなどと思われた。いつだったか、ある府庁の役人が救済金を携えて田舎を

旅行していると、一発の下に脆くやられて金を奪われた話を聞いたが、その地方は、たしかにこの辺だなどとも、栄策は考えたりした。（33頁）

そして、目的地である主人の部落に辿り着く前に、1920年の「間島出兵」時の日本軍と不逞鮮人との銃撃戦を連想させる、次のような朝鮮人通訳との会話も出て来る。

『この山から向こうが、不逞鮮人団の根拠地になっているのですよ』

と通訳は、今の土人達で思い出したように云って、

『いつかは、この山を堺にして、警察隊と不逞鮮人と戦ったのですよ』

とまたつけ加えた。栄策はそれを聴くと、軀が急に引き緊ってくる。

『いよいよここからが危険地帯だね』

と栄策は云ったがもうそこで山峡は尽きて、その向こうに、真白く光った河が横たわっているのが見えた。（34頁）

このような節では、栄策の心理的状态を描写するために、大衆向けの「不逞鮮人」言説の表現とその朝鮮観が無批判で反復されているようである。「人心を戦慄せしめる「不逞の情報は、マスコミを通じて内地に伝えられる排日朝鮮人の独立陰謀や兇暴な犯罪に関する報道に他ならない。このことから、「不逞鮮人」と「心から語ってみたい」主人公が、朝鮮人との連帯を目指す世界主義者もしくは社会主義者であるにもかかわらず、新聞・雑誌の一般読者と同じように朝鮮人をテロリストや犯罪者として表象する報道に影響され、朝鮮人に対する恐怖心と偏見に囚われていることが確認できる。しかも、小説の前半において、栄策が想像している「不逞鮮人」の危険性について、読者にこれを疑わせるような三人称話者によるコメンタリーはないのである。語り手の視点は日本人主人公の内面に限られている。さらに、栄策は朝鮮を旅する「日本人」として不安と恐怖を感じている——つまり宗主国人というアイデンティティのため危険がある——が、中西の作品ではなぜ朝鮮人が日本人に危害を加えようとしているのかという動機や「不逞鮮人」とは、一体どんなものかということには直接触れられていない。「数年前に、この国で、ある民衆運動は起って遂に大きい騒擾」とは、明らかに三・一独立運動のことを指すが、厳しい検閲への恐れのためか、「独立」という言葉は使われておらず、植民地的支配という背景は暗示されているに過ぎない。従って、栄策は自分が認識している恐怖と、朝鮮人の恨みの種である日本帝国による搾取と弾圧との繋がりを理解していない。

小説として、『不逞鮮人』は、探偵小説や推理小説のような心理的なサスペンス、緊張感や不確定性をを高めるために、主流となっていた不逞鮮人言説とその作用に対応する「間テキスト性」に頼っている。言わば、ある効果を発揮するように、それを利用したのである。碓井栄策は、自称冒険家でありながら、一種の探偵でもあるように思われる。彼が解かなければならない諸謎は、いわゆる「不逞鮮人」の本質とは何か？ 会いに行く朝鮮人の主人は果たして「不逞鮮人」の首魁なのか？ などである。また、主人との対話の直後、栄策自身が自覚する「解し難い謎」は「こんなところで、あんな人達が、どうして血腥い凄惨な迫害を日本人に加えたのか」（64頁）ということである。探偵小説と同様に、この謎は物語のクライマックスまで解かれない。当時、

多くの海外や日本の探偵小説を紹介し、後年江戸川乱歩にデビューする場を与えた雑誌『新青年』が1920年に登場すると同時に、探偵小説は一層本格的に注目され始めた。同時代の『新青年』の探偵小説に関して、鈴木貞美は、中島河太郎の探偵小説研究を踏まえ、推理、怪奇、幻想を勿論、ほとんど探偵と関係ないユーモラスな作品でも「ちょっと変わった読み味のものが、『探偵小説』の名の下に総括されて」いたと指摘している。だとすれば、中西の作品も、植民地的謎を解き明かす「探偵小説」と見なしても、差し支えはないとだろう³¹⁾。実際に、初期段階の『新青年』でも、通俗的な観点から当時の政治問題や国際問題を取り扱う作品が多く、「不逞鮮人」のような怪しい朝鮮人と独立「陰謀」が登場する探偵小説や奇怪小説も発表されていた³²⁾。『不逞鮮人』は、同時代のプロレタリア文学作品より、『新青年』のこうした作品と共通点が多いであろう。そして、例えば1920年代半ばから、プロレタリア理論家・批評家平林初之輔が『新青年』に参加し探偵小説を発表する事例もあって、プロレタリア文学・芸術の「大衆化」への試みはあったものの、中西は早くにこの傾向を把握し、「探偵小説」という幅広いジャンルを恐るべき「犯罪者」のような「不逞鮮人」を描写するのに相応しいものと考え、その人気ジャンルの要素を『不逞鮮人』に取り入れたのではないだろうか？

これは、中西伊之助文学の特徴である通俗小説や大衆小説への志向と関連していると思われる。大宮光男は、中西の1934年の作品『満州』について「大衆活動家中西伊之助が大衆を労働運動の楽しさに眼覚めさせ、誘惑するプロパガンダの書といえるかもしれない。この頃、中西はプロレタリア文学に対し、眈を決して読むものとしてではなく、大衆が楽しんで読むエンタテインメント化する志を持っていたのではないだろうか？」と示唆している³³⁾。主題は労働運動ではないが、『不逞鮮人』にも同じ志向が見られる。1923年に、中西は、前年に『緒土に芽ぐむもの』を書いて小説家になったきっかけをこう述べた。「なにしろ前年の冬に監獄から出て来た僕はとてももうどこかの資本家も雇ってはくれないし〔中略〕そこで一面には面白くて、一面には思想宣伝に最も都合のいい小説を書いて、その上に当分のしのぎをつける一挙三得のつもりで、その大作を改造社へ持ち込んだ」〔出典〕と振り返っている。つまり、小説家になったきっかけは、第一に生活上の必要で、そして面白い思想宣伝としての小説への関心と言えるであろう。プロレタリア文学陣営の中、小説をプロパガンダの武器や道具と見なしたのは確かに中西一人だけではない——中西の「恩師」である堺利彦も早くからその可能性を見出している——が、小説を有効な武器にするには、多くの読者の注目を引く必要があることに対して、中西は非常に意識的であった。そこで、読まれたい、売りたいという文学的な野心を持つ中西伊之助は、プロレタリア作家として必ず入れる「教訓」を、いつも読者の関心を引く大衆エンタテインメント的糖衣に包ませるのである。例えば、『緒土に芽ぐむもの』や『汝等の背後より』の場合、労働運動や政治活動に恋愛の挿話を面白く織り込むが、『不逞鮮人』の中では、探偵小説のような、戦慄させるサスペンスや恐怖が娯楽的価値としての役割を果たす。また、緊迫した雰囲気の高めることによって、後半の意外な展開のための舞台を準備する目的もあったと考えられる。

『不逞鮮人』の緊張感と疑心暗鬼が最高潮に達するのは、栄策が主人の家で過ごす、恐怖に満ちた一夜である。その前の宵の対話の中で、三・一独立運動の弾圧で娘を亡くした主人が、日本民族の構成員である栄策に向かって、拙い日本語、身体の素振り、そして何より娘の血まみれのチョゴリによって、日本帝国の罪悪に対する怨恨を直接訴える場面がある。栄策は三一運

動後の朝鮮民族の苦しみと恨みに、コロニアル言説の歪曲された媒介なしで直面させられるのである。しかし、この心からのコミュニケーションは、栄策の不安を解消するどころか、むしろ朝鮮人の苦痛と怨恨を認識した上でその不安を激化するように働く。結果として、真夜中、寝室に闖入者の黒い影法師に気づくと、その地域の排日鮮人、または家の「主人」自身が「日本人のあるのを嗅ぎつけて」彼を虐殺しに来たと思いこむ。眼に「憎悪と復讐に燃えさかっている」主人の妄想を見て、主人宛の紹介状をくれた栄策の朝鮮人友人・洪も関与する栄策を生け贄にするという主人の不逞「陰謀」まで想像してしまう。それは、次のような描写に表れている。

一挙^{いっきよ}に二人^{ほふ}を屠ろうとする戦略である。最愛の娘の血を啜^{きゅうてき}った仇敵の片われを！ 栄策は洪に陥れられたのだと思った。洪は自分たちを手引きして、舅の復讐心を満足せしむべく犠牲の祭壇に供したのだと思った。安価な世界主義者は、ままと彼等の術中に陥ってしまったのだ。(67頁)

栄策の内面で展開される夢のような被害妄想によって、読者は栄策と共に、「不逞鮮人」という他者に対する恐怖や罪悪感とその裏にあるコロニアル関係のコンテクストに向き合うことを強制させられる。

しかし、ナラティブのこれまでの緊張感と恐怖に満ちた雰囲気は、最後のアイロニックな展開のインパクトを強化するように働く。最終的に主人の家では「不逞鮮人」から栄策に何の脅威もなかったことが明らかになる。逆に主人が栄策の部屋へ来たのは、実際の暴力加害者である宗主国日本の一員を恐れて、栄策が武器を持っているかを調べるためであったと示唆されているのである。そして、「不逞鮮人」の叫びと思われた音は滑稽なことに、梟の鳴き声だったと明かされる。主人の家から脱走しようとする栄策が、「……便所、わかりませんか……」と出て来て言う主人の滑稽に聞こえる台詞などでついに目が覚めたように、体験していた恐怖や妄想は自らの中の一場の「悲喜劇」や「強烈な生の執着から躍り出した」「夢幻劇に過ぎなかったのだ」ということがわかる。結局、この小説において、「不逞鮮人」は日本人主人公の想像の中にしか存在しない。というのも、「不逞鮮人」とは、支配者側から見て、侮辱し恐れる独立運動家や日本に対する反感を持つ朝鮮人を指す言葉に過ぎないからである。皮肉な転換によって暴露される「謎」の真実は、主人が「不逞鮮人」か「善良な臣民」か、ということではなく、「不逞鮮人」を恐れ、憎悪する大正日本の朝鮮人観とコロニアル言説の矛盾やアンビヴァレンスである。これは、ヘーデン・ホワイトやリンダ・ハチオンが指摘したような、権力的ディスクールを転覆する可能性を含むアイロニーという転義法の作用である。一挙に小説全体の読み方を変えると同時に、前半で反復される「不逞鮮人」報道や、「テロリスト」への恐怖によって帝国主義的暴力の責任を朝鮮人側に転換し、被圧迫民族の不平や恨みに耳を傾けようとしないうコロニアル言説と意識を、風刺し、転覆する効果が生まれるのである³⁴⁾。しかし、シーグルが指摘しているように、アイロニック・モードには、皮肉に頼る対抗言説と、皮肉によって批判される言説との間に親密な関係があるから、読者に読み間違えられたり、または支配的言説との共犯関係におちいる危険性がある。中西が「不逞鮮人」報道を反復・擬態する傾向について同様な危険性があったことは否定できない³⁵⁾。

最近の論文、「プロレタリア文学のなかの民族問題」で川村湊は、植民地帝国主義における民族問題に真剣に取り組まなかった日本プロレタリア文学者の軽薄さと潜在的な宗主国人としての優等意識がどれほど被圧迫民族との真の連帯の形成を妨害したのかということ辛辣に指摘している。そして代表的な事例として、中西の『楮土に芽ぐむもの』と『不逞鮮人』などを取り上げ、その朝鮮人に対する言葉遣いと描写を厳しく批判している。川村湊によると、「こうした中西伊之助の小説に描かれた朝鮮人の肖像を見てゆけば、彼が抑圧された民族としての朝鮮人の同情者とも理解者とも思えなくなる。何より彼は、自分が宗主国人としての日本人であり、そうした日本人の自分が朝鮮人にとっていかなる存在として見えるかという自省的な観点が無いのだ。彼には社会問題として朝鮮や朝鮮人を取り上げようとする文学的野心はあっても、結局のところ、自分自身に還ってくる文学的（倫理的）主題としての「民族問題」は、そこに存在し得ないのである。」³⁶⁾

確かに、朝鮮や「不逞鮮人」を食い物にする中西の文学的野心や、言葉狩りという観点から「土人」や「不逞鮮人」などの言葉遣いを批判する余地はあるに違いない。しかし、大衆コロニアル・ディスクールのコンテクストの中で捉えていないためか、川村は重要なことを読み落としていくように思われる。まず、現代の視点から考えられる「朝鮮人の同情者」や「理解者」かどうかという水準で大正期の中西伊之助を判断することは相応しくないのではないだろうか。当時において、「ブルジョア」文学でも「プロレタリア」文学でも珍しい「民族問題」への鋭い眼差しは『不逞鮮人』をはじめ、この時期の中西伊之助の作品にうかがえる。中西は常に宗主国日本人としての自分の主体性やそれに伴う優越感や偏見を前景化・問題化していた。川村が指摘するように、『不逞鮮人』の「日本人としての主人公は自分の立場」も「支配者と被支配者、加害者と被害者との関係の絶対性」も理解できないが、中西伊之助とその登場人物を同一視すべきではない。例えば、『不逞鮮人』と同じ時期に書かれたエッセイの中で中西はこう述べている。「私は従来、度々朝鮮を旅行する。その場合、私はいつも心の中に覚悟していることは「死」である。何時、朝鮮人が日本人である私を虐殺するか知れない。彼等は、一日本人である私を、決して許しはしない。彼等は、機会があれば、私を路上に殺してしまふかも知れない。その場合、私は屑良く朝鮮人の復讐の犠牲になる覚悟をしている。彼等にとって復讐は当然の感情であるからである。」³⁷⁾ このことから、中西が加害者である「日本人としての自分が朝鮮人にとっていかなる存在として見えるか」を当時の日本人としては十分に把握していたことは明らかである。

実は、『不逞鮮人』では、世界主義者である栄策の葛藤を通じて、潜在的支配民族意識と恐怖に囚われたまま民族という概念を軽視し、無邪気に新思想だけで「人類愛」や「世界同胞」と唱えながら民族を簡単に超克できると思いついでいる知識人、特に左傾批評家と文学者の軽薄さが風刺と批判の対象にされている。社会主義理論に則って民族問題より階級問題を優先させた他の左傾思想家や作家とは対照的に、中西は支配民族と被支配民族を分ける民族問題を重大問題とみなした。また高柳俊男が中西の民族観について述べたように、「朝鮮人との連帯を志向しながら、支配する自分達日本民族と支配される朝鮮民族の間に横たわる溝を常に念頭に置いていた」³⁸⁾ のである。大衆への志向を持った中西は、偏見を含めて「民族」概念への庶民的認識を身につけ、これを問題にする必要性を理解していたのではないか。その結果として、被支配民族を差異化・差別する一方、表面では「日鮮同祖論」や「内鮮融和」と主張し民族間の違

いを否認するコロニアル言説を再生産する落とし穴を回避できたのである。

『不逞鮮人』では、歪められた宗主国と植民地との関係下で、異民族としての差異を尊重する上で人間として「他者」に接触することの困難さが痛烈に描写されている。中西は、簡単に超克できないこの問題を日本と日本人の問題として直面し反省する責任は宗主国側にあると示唆している。作品の最後になると、それまで榮策の視点に結びついた語り手が突然切り替わり、作者中西が読者に向けて直接に話すような形で、物語の展開を振りかえり、「すべては自分達の民族の負うべき罪だ」という反省で小説の幕が下りる。検閲などの思想・言論統制の体制により、植民地支配と独立運動への弾圧を直接的には批判できなかったと思われるが、この一行は皮肉に伴う作品の主旨をめぐる曖昧さを解消しようとするものである。宗主国日本の人間として、恐怖と偏見の源である植民地帝国主義の構造を凝視し、朝鮮人の現実的かつ言説的な圧迫への共犯性を認める「自責の念」こそは、支配者・被支配者間の民族問題を通り抜けた新しい関係の構築への第一歩だということが提案されているのではないだろうか。

これを1つの出発点として、「霧」などで「不逞日本人」と名乗った中西伊之助は、他方では不逞日韓人連帯の可能性を模索した兆しもある。「不逞日本人」として、実際に「不逞鮮人」とされる人々との豊かな交流があった。例えば彼は、不逞社を結成して中西とはやや違う視点から「不逞鮮人」という言葉と表象に取り組んだ朴烈・金子文子夫妻などと親しい関係を持っていた。また、中西は「不逞鮮人」作家・鄭然圭チヨン・ヨンギョの育成に努め、編集人である中西の推薦によって1923年の『芸術戦線—新興文芸二十九人集』の中に鄭が日本語で書いた作品を収めている。クワン・ヨンミン権寧眠が詳しく述べたように、中西は朝鮮における階級文壇とも関わり、1925年にソウルで開かれた「中西伊之助歓迎懇談会」は、結局「朝鮮プロレタリア芸術同盟」の創立準備会になったこともあげられる³⁹⁾。一貫して朝鮮に眼差しを向けた創作活動とこれらの活動により、中西は不十分ではあったがそれ以降の朝鮮人と日本人のプロレタリア文学者・芸術家の間に植民地主義的関係に束縛されない連帯の基盤を築いたと言えるであろう。大正時代から一人歩きしてきた「不逞鮮人」という言葉に集約されている朝鮮・韓国観を受け継いだ戦後日本においても、特に韓国併合百周年である2010年現在では、中西伊之助の大衆向け「不逞鮮人」言説との皮肉な交渉と、自らの日本人としての偏見への告発から得られる示唆は多いと考える。

注

- 1) 中西伊之助「霧」（『読売新聞』1922・12・18）。中西伊之助『隨筆支那・満州・朝鮮』（実践社 1936・4）にも収録されている。
- 2) 鶴見俊輔「朝鮮人の登場する人物」（桑原武夫編『文学理論の研究』岩波書店 1967・12）や村井紀『南島イデオロギーの発生：柳田国男と植民地主義』（福武書店 1995・1）を参照。
- 3) 特に石坂浩一「近代日本の社会主義と朝鮮」（社会評論社 1993・10）と林淑美「＜インターナショナルイズム＞はく餓頭問題＞を越えられたか」（『昭和イデオロギー：思想としての文学』平凡社 2005・8）を参照。
- 4) 波瀾剛『越境のアヴァンギャルド』（NTT出版 2005・6）14頁を参照。
- 5) 中西伊之助のプロレタリア作家としての履歴について、小林茂夫「解説」（『日本プロレタリア文学集 中西伊之助集』新日本出版社 1985・7）を参照。
- 6) 勝村誠「大正・昭和期の朝鮮—中西伊之助」（『社会文学』2009・2）29頁。

- 7) 宮本百合子「この岸辺には」(『文芸』1939・11)。
- 8) 「新しき朝鮮」(『東洋』1922・4～6月号), 「朝鮮人のために弁ず」(『婦人公論』1922・11-12月合併号), 「朝鮮解放運動概要」(大宅社一編『社会問題講座』新潮社 1926・8)。また黒川創編『<外地>日本語文学選集 第3巻 朝鮮』にも収録されている。すべてのページ番号は同書による。
- 9) 「愛読者への履歴書」(『新興文学全集 第2巻 中西伊之助集』平凡社 1928・2)。
- 10) 高柳俊男「中西伊之助と朝鮮」(『季刊三千里』三千里社 1982・春号) 220-221頁。
- 11) 『不逞鮮人』の初出は『改造』(1922・9)。戦後に改題され、『北鮮の一夜』(人民戦線社 1948)として発行された。
- 12) 生田長江「九月号の作品から(二)」(『読売新聞』1922・9・3), 矢部周「不逞鮮人一改造」(『月刊局外』1922・10), 江口漢「中西伊之助の作品を通読して(四)」(『読売新聞』1922・12・29)。
- 13) 中西伊之助「黒煙」(『赤列車』欄, 『種蒔く人』1923・2)を参照。
- 14) 渡辺一民『「他者」としての朝鮮: 文学的考察』(岩波書店 2003・6) 23頁。
- 15) 黒川創「旗のない文学」(『<外地>日本語文学選集 第3巻 朝鮮』新宿書房 1996・3) 333頁。
- 16) Barbara J. Brooks, "Peopling the Japanese Empire: The Koreans in Manchuria and the Rhetoric of Inclusion," *Japan's Competing Modernities: Issues in Culture and Democracy, 1900-1930*, ed. Sharon Minichiello (Honolulu: University of Hawaii Press, 1998), p.30.
- 17) 『不逞事件ニ依ッテ見タル朝鮮人』(百五人事件資料集 第2巻 不二出版 1986・1)
- 18) 『本邦人在留禁止関係雑件』(『韓国独立運動資料34』国家報勲処 2008)を参照。三・一独立運動以前, 帝国領事館作成の報告書には, 「排日鮮人」と「不逞鮮人」は交互に用いられている。
- 19) 韓国史料研究所編『不逞鮮人 朝鮮統治史料 第8巻』韓国史料研究所 1971・7)
- 20) 金正柱「解説」(前掲) 1頁。
- 21) 例えば, 「不逞愛蘭人追放」(『読売新聞』1920・9・23) や 「不逞愛蘭人懸賞で搜索する」(『読売新聞』1924・3・24)を参照。
- 22) 「戦前日本在住朝鮮人関係新聞記事」<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~mizna/shinbun/>
- 23) 「厄介な不逞鮮人」(『読売新聞』1920・10・9～12)
- 24) 松尾尊兌「解説」(吉野作造『中国・朝鮮論』平凡社 1970・4) 367頁。
- 25) 吉野作造「朝鮮青年会問題」(『新人』1920・2～3号)。
- 26) 栗原荒野「不逞鮮人」(『斬馬剣』欄, 『読売新聞』1921・9・16)。
- 27) 李鐘模「親日排日」(『斬馬剣』欄, 『読売新聞』1922・1・28)。
- 28) 『「太い鮮人」刊行に際して』(『太い鮮人』第1号 1922・11)。金子ふみ子『何が私をかうさせたか』(黒色戦線社 1975 増補決定版)に収録。
- 29) 朴文子「所謂不逞鮮人とは」(『太い鮮人』第2号, 1922・12)。
- 30) 中西伊之助「瓢の花咲く家一朝鮮から」(『東京朝日新聞』朝刊 1922・10・3～6)
- 31) 鈴木貞美『「新青年」モダニズムの展開』(『昭和文学のために』思潮社 1989・10)。
- 32) 例えば, 「怪鮮人」が登場する作品は, 『新青年』2号に発表された高橋銀舟の「不思議の小函」(『新青年』1920・2), また広田花崖「猛虎の審判」(『新青年』1920・4), 瀬頭紫雀「上海假政府の地下室に寝る」(『新青年』1922・8)を参照。しかし, 中西の『不逞鮮人』と同様に, 「不思議の小函」では, 危険人物と見られた朝鮮人は, 結局小説の悪役ではなく, 「独立陰謀」は日本人の主人公の勘違いによるものである。
- 33) 大宮光男「解説『満州』」(『リバイバル<外地>文学選集 第四巻 満州』大空社 1998・11)。
- 34) Hayden White, *Metahistory: the Historical Imagination in Nineteenth Century Europe* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1973) pp.37-38, . Linda Hutcheon, *Irony's Edge: The Theory and Politics of Irony* (London, New York: Routledge, 1994) pp.26-29.
- 35) Siegle, Robert. *Suburban Ambush : Downtown Writing and the Fiction of Insurgency*. (Baltimore: Johns

Hopkins University Press, 1989) p.390.

- 36) 川村湊「プロレタリア文学のなかの民族問題」(『国文学 解釈と鑑賞』2010・4) 63頁。
- 37) 勝村誠「中西伊之助の文学における〈朝鮮〉」(木村一信編『韓流百年の日本語文学』人文書院 2009・10)による引用。勝村はこの一節の出所を「花影暗し」『内観』(1922・4)としているが、現在、この一節のある随筆を確認できない。
- 38) 高柳俊男「中西伊之助 民族の溝を意識しつつ連帯をめざす」(『韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人』明石書店 2002・4) 126頁。
- 39) 権寧眠「中西伊之助と一九二〇年代の韓国階級文壇」(『社会文学』1993・7号)を参照。